



# 越冬支援 活動報告

秋から冬にかけて、たくさんの方からご寄付をいただきました。おかげさまで現地での支援が具体化しています。

4 ページから 7 ページまでの報告：中村哲也

## 窓ガラス支援

戦争後、最初の冬を迎えました。ガザが最も冷え込むのは12月の終わりから1月の終わりにかけてです。地中海性気候のガザでは冬は雨季で、冷たい雨が降ります。雨が降らない日も激しい風が吹いて砂嵐のような天気になることが多くあります。ガスや電気が不足し、また暖房器具の乏しいガザでは冬をどう乗り越えるのかが大きな問題です。

いたるところガラスのない窓がたくさん見えます。ビニールを張ったり、ブルーシートをかけて風雨をしのいでいますが、ビニールがはがれたり穴が

開いているところも目立ちます。ガラスもセメントなどと同じで搬入を許されていないからです。

キャンペーンでは窓ガラスが壊れたままになっていた NGO の診療所や幼稚園、障害者施設のガラス修復を実施しました。地元の団体は他のことに資金を使いたいので、窓は後回しにされていました。少々値がはりますが、トンネルからの密輸ガラスが入手できるのです。

昨年と一緒に子どもたちの健康診断を行った NGO「保健連合」の診療所は、毎日多くの人が訪れる中、診察室も薬局もガラスのないままで診療活動を続けていました。窓ひとつひとつのサイズに合わせて新しいガラスを準備

し、合計 11㎡の窓ガラス修理を実施しました。新たに屋上の太陽熱温水器も設置しました。ナジディ幼稚園（園児 100 人）でもガラス支援を実施。幼稚園や事務室の窓ガラス 32.5 ㎡を修復しました。

エジプトとの国境近くにあるアル＝アマル・リハビリテーションセンターは、ガザ南部の聴覚障がいや発達障がいの子どものための幼稚園やデイセンターを運営しています。ガラスのない窓からはエジプト側がよく見えます。4 階建ての建物の爆風で飛ばされた窓（200㎡以上）や扉を修理中。このセンターのスタッフの多くは、ガザ市のアトファルナろう学校で研修を受けた人たちです。



## 廃品を拾う子どもたち

ガザを移動していると、色々なところで、大きな袋を担いで歩き回っている子どもたちに出会います。袋の中にはペットボトルやプラスチックのパイプ、ポリタンクなどがぎっしり。プラスチックや鉄製のものを、瓦礫の中やゴミ捨て場から集めているのです。集めたものを引き取り業者のところに持って行くと、1kgで33円に換えることができるからです。

破壊の被害が大きかった北東部のアベドラボ地区で、瓦礫の周りを歩き回るイスマイル（13歳）とアラくん（10歳）兄弟に会いました。（表紙写真）

「朝から夕方までかけて袋一杯に集めているよ。袋ひとつで125円ぐらい。二人で集めて一日250円ぐらい。そのお金で週末にお父さんが食べるものを買に行くんだ。お父さんは身体にマヒがあるし、お母さんも働いていない。10人兄妹で他は幼い妹たちだし、僕らが一番年上だから一家の稼ぎ手にならなくちゃいけないんだ。学校には二人とも行っていないよ。」

回収業者のワーエドさんのところには毎日30人ほどの子どもたちが廃品を持ってやってくるといいます。放課後に集めてくる子がほとんどですが、学校に全く行かずに1日中集め歩いて大量のプラスチック



を集めてくる子も10人くらいいるそうです。

集められたプラスチックは工場に運ばれ粉碎され、プランターやタンクなど食品用途以外のものに再生されます。こうした回収業者はガザ中にたくさんあるので、学校に行かずに働いている子どもたちの数はかなり多いと思います。



## 地元産品を使った食料支援



この冬も食料配布を実施しました。野菜などの生鮮食料品をガザ地区内の農家から買取り、買えない家庭に配布するプロジェクトです。アトファルナろう学校、パレスチナ農業委員会と協力して実施しました。

対象になったのは貧しい聴覚障害者家庭30世帯3000人。内容は生鮮食料品で、トマト、きゅうり、ジャガイモ、玉ねぎ、チーズ、ナツメヤシペースト、香辛料、蜂蜜、卵、オリーブオイルなど。一家10人が10日間食いつなげる量です。

国連の食糧配給がありますが、小麦粉などが中心で、燃料がないガザではパンを焼くこともままなりません。また、乾物中心なので、「おかず」になるものは現金で購入しなければなりません。キャンペーンの食料配布は、また、地元産の生鮮食料品を買い上げるため、地元経済の活性化にもつながります。野菜の季節なのに買えない人々が多い一方で、農家も出荷できずに困っているからです。

